

定量評価実験においてビームラインスタッフの協力なくしては有意なデータの取得はできなかったと思います。この場をお借りして、松井先生をはじめとする関係者の皆様、ならびに分子研時代の生活を支えて下さった全ての皆様に感謝申し上げます。今後もUVSORでの貴重な経験を活かして加速器における材料工学の研究に幅広く取り組み

たいと思います。

私は異動先の名古屋大学において次世代の研究者を育てるとともに、実用化に向けてフォトカソードの研究開発を続けています。特に、フォトカソードの電子構造と物理的な劣化メカニズムの解明を目指した放射光利用研究を進めています。その初期の成果を2023年9月に仙台で開催された日本

物理学会第78回年次大会において当グループの学生が発表し、学生優秀発表賞を受賞しました。このような研究にご興味のある方が居られましたら、遠慮なくご連絡いただければと思います。UVSORとの新しい連携を楽しみにしております。

(郭 磊 記)



## 分子研を去るにあたり

**小林 玄器** 理化学研究所 主任研究員  
(前 協奏分子システム研究センター 特任准教授→  
物質分子科学研究領域 准教授)

### 研究者としてのターニングポイント

こばやし・げんき / 2010年東京工業大学 博士(理学)取得。同年、同大学博士研究員、2011年神奈川大学 特別助手、2013年分子科学研究所協奏分子システム研究センター 特任准教授(若手独立フェロー)、2018年同研究所物質分子科学研究領域 准教授を経て2022年より理化学研究所開拓研究本部 小林固体化学研究室 主任研究員(現職)。2012-2016年 JSTさきがけ研究者、2018-2022年 総合研究大学院大学 准教授、2022-2023年 分子科学研究所 教授、2023年~早稲田大学先進理工学部 客員教授を兼務。



実は、ごく最近まで「分子研を去るにあたり」の原稿を書く気持ちになれず、先送りにし続けていました。これまでの研究活動の大半を占める分子研での約9年間の日々は、私にとってあまりにも大きな存在であり、何をどう書くべきか優先順位をつけられなくなっていたからです。2022年6月に理化学研究所に異動して1年半が経ち、ようやく、たとえ拙い言葉であっても自分の感謝の気持ちを伝えなければいけないという思いが勝り、原稿を書くに至りました。

若手研究者にとって、学位取得後の

5~7年程度の期間をどう過ごすかが後の研究者人生を左右すると言っても過言ではないと思います。日本では多くの場合、助教や研究員の立場で研究を推進することになりますが、スタッフとして研究成果を積み上げる(多くの論文を発表する)ことと自身の研究のオリジナリティーを確立することのジレンマに陥る方も多いのではないかと思います(もちろん、中には全てをハイレベルにこなせる超人もいますが)。私の場合、幸いにして比較的早い段階で現在の主要テーマであるヒド

リドイオン導電体の研究に出会い、やりたいことは明確になっていましたが、研究者としては圧倒的に実力不足でした。ヒドリドイオン導電現象を実証するための知恵、共同研究のための人脈、研究設備を整えるための予算獲得能力の全てが不足していました。特に、研究費に関しては日本の制度下で若手研究者が獲得できる予算には限界があり、やりたい研究を進められない状況に憤りを感じていた時期もありました。実績の無かった私にPIとして独立する機会を与えて下さり、潤沢なスタートアップ資金のサポートもしてくれた分子研には感謝しかありません。私の研究者

人生の転機であり、分子研に着任してなければアカデミアとしてのキャリアを諦めていたかもしれません。当時、若手独立フェローはポスドクを雇用することができなかったもので、一人での研究室立ち上げには苦労があったことも事実ですが、同時にその状況を心底楽しんでいました。論文に関しても、独立当時は責任著者として実験結果と考察全てに責任を持つことに不安がありました。早い段階でそれを経験できたことは非常に有意義でした。日本のアカデミアは、講座制の助教を経験

することがキャリアとして一般的です。それ自体は、研究者の着実な成長と知識・技術の継承という点で極めて重要ですが、環境によっては若手研究者の独自性の開花を妨げてしまうこともあると思います。多様なキャリアパスを提供するために、分子研が今後も若手研究者が独自の研究課題に挑戦する場であり続けることを願っております。

最後に、PIになる機会をくださった大塚所長、研究者としての成長を促してくださった川合所長、理研に快く送り出してくださった渡辺所長、メンター

の横山先生を始め適度な距離感で常にサポートして下さった教授の皆様、同僚として切磋琢磨してきた准教授の皆様、分子研の全ての関係者の皆様にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。そして、小林グループのスタッフと学生の皆様、苦楽を共にしながら黎明期の研究活動を支えていただきありがとうございます。皆と立ち上げた研究を発展させられるよう、今後も精進いたします。引き続きよろしくお願いたします。

## 草本 哲郎

大阪大学 大学院基礎工学研究科 物質創成専攻 未来物質領域 教授  
(前 生命・錯体分子科学研究領域 准教授)

### 分子研の思い出と岡崎での日々

くさもと・てつろう / 2010年東京大学大学院理学系研究科にて博士(理学)の学位取得。同年理化学研究所 特別研究員、2011年同研究所 基礎科学特別研究員。2012年東京大学大学院理学系研究科 特任助教、2013年同研究科 助教。2019年分子科学研究科 生命・錯体分子科学研究領域 准教授。2023年4月より現職。週末は野球にのめりこんでる息子達とのキャッチボールやバッティング練習で汗を流しています。



私は4年と9か月(うち6か月は兼任として)の間、分子研にお世話になりました。この間、実に充実した日々を過ごすことができました。本稿では分子研でお世話になった皆さんへの感謝、分子研の良さや岡崎での生活で感じたことを伝えようと筆を手にとったのですが、いざ文章にまとめようとすると、様々な思い出や想いが錯綜しなかな筆が進まず……。うまくまとめきれないので、とりとめもなく書き下していこうと思います。

私が分子研に来たのは2019年1月でした。年初に川合眞紀所長から「頑張れよ!」と激励の言葉を頂いた後、さっそく研究室スペースの設計に取り掛かりました。着任が年度末近くだったこともあり、限られた時間の中で研究室スペースを一から設計するのは骨が折れましたが、

研究室を自分好みに作り上げられることに喜びを感じていました。中でも真っ新たな実験台とドラフトが導入された合成室が完成した時は、思わず感動の声が漏れてしまいました。現所属でラボを運営するにあたり、改めて、分子研の風通しの良さ、機動性の高さ、温かいサポートと自由度の高さを実感しています。

研究面では、2020年以降のコロナ禍も関係して、新しいテーマに腰を据えて取り組むことができました。必然的に研究室には私自身これまで使ったことない装置が並ぶこととなり、予期せぬ事態(振動問題等)等いろいろありましたが、やりたい研究に集中することができました。研究を進めるにあたり分子研機器センターに大変お世話になりました。機器センターでは専門のスタッフにより多種多様な装置がいつでも使えるよう適切に

維持・管理されており、素晴らしいです。具体的な実験内容にも相談に乗って頂きました。今後も外部ユーザーとして引き続きお世話になりたいと思っています。

分子研では家族との時間を大切にすることもできました。職場(山手キャンパス)のすぐ目の前にある小学校から、元気なかけ声や音楽が聞こえてくるたびに、運動場を駆け回る息子たちの姿を想像していました。分子研のキャンパス内にはたくさんの生き物がいます。私の二人の息子達は、岡崎に来た当初(当時息子達は5歳と2歳でした)、分子研のことを「バツ天国」と呼んでいました。夏の終わりには「トンボ天国」になりました。ある夏の夕方、息子達と山手キャンパス内を散策していた時に、コクワガタが木の幹を走っているのを見つけました。実はそ

の木は樹液が溢れでていて昆虫が集まる「魔法の木」でした。夏になると息子達や研究室メンバーと夜な夜なその木を観察しに行き、幾多のカブトムシやクワガタと戯れることができました。岡崎に来る前に住んでいた地域では、子供が遊べる公園はいくつもあったのですが、どこも整備が行き届いていた一方で、昆虫等の生き物に出会うことが滅多に無く、個人的に寂しさを

感じていました。岡崎では昆虫は勿論の事、川にいけばザリガニ、めだか、亀、はたまたライギョまで……、童心にかえて子供達と一緒に遊んだ時間が愛おしいです。私の場合は、分子研に来て、以前よりもはるかに長く濃密な時間を家族と過ごせたことが、研究をより一層楽しめたことに繋がっているように感じています。

最後にお世話になった分子研の皆様

に厚くお礼申し上げます。助教の松岡さん、秘書の川口さん、増田さん、青木さん、佐々木さんを始め、生命・錯体分子科学研究領域の先生方、機器センターの皆様、技術推進部の皆様など、多くの方に支えて頂きながら研究室生活を進めることができました。分子研とは今後も引き続き関わっていただけるとよいなと思っておりますので、これからもどうぞよろしく願いいたします。

## 松岡 亮太

大阪大学 大学院基礎工学研究科 物質創成専攻 未来物質領域 助教  
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

### 分子研最高！

まつおか・りょうた／三重県四日市市出身。2017年3月東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士後期課程修了、博士（理学）取得。筑波大学助教（2017.4～2019.12）を経て分子科学研究所助教（2019.12～2023.7）、2023年8月より現職。



2019年12月から2023年7月までの間、生命・錯体分子科学研究領域錯体物性研究部門 草本グループの助教としてお世話になりました。現在は2023年4月に大阪大学に教授としてご栄転された草本先生の研究室で引き続き助教として研究を続けさせていただいております。短い期間ではありましたが、集中して研究に打ち込めたこと、そしてたくさんの素晴らしい人と出会えたことで、分子研では非常に幸福な時間を過ごすことができました。

分子研は研究環境が本当に素晴らしかったです。実験室では流し台に「純水が出る蛇口」が、ドラフトチャンバーに「いつでも吸引る過ができる吸気バルブ」が付いていたり、研究効率を高めるための設備が随所に設置されていました。共用の大型測定装置は機器センターが管理してくださっていて、保守に時間を割くことなく、いつでもベストコンディションで測定を行うことができました。

た。下っ端の助教に降りてくるはずの雑用はほとんどないと言ってもいいほど少なく、勤務時間のほとんどを研究活動に費やすことができました。

分子研で働く人たちも素晴らしい人ばかりでした。教授・准教授・助教の先生方はみなそれぞれの分野で活躍されている一流の研究者で、そんな先生方とも気軽にディスカッションができる垣根の低さが分子研全体の空気としてあるように感じました。おかげで、研究の幅を大きく広げることができると同時に、自分も質の高い研究をしなければならぬ、という緊張感を常に保つことができました。オープンスペース推進の流れで2021年秋頃に瀬川グループと居室が共同になってからは、2グループで集まって論文抄録会をしたり、夜に他の階からも人を集めて酒を飲みながら研究の話をしたりと、他グループとの関わりもさらに増え、充実した時間を過ごせました。技術員さん

や技術支援員さん、秘書さんや戦略室の方々もいい方ばかりで、誰とでも気軽に打ち解けた話げことができました。

お世話になった分子研の皆様は心から御礼申し上げます。とくに草本先生には分子研採用時から現在進行形で多大な配慮をいただいております。感謝してもしきれません。その他にも木村君、中貝さんなど草本グループOBOGの皆様、秘書の増田さん、川口さん、部屋が一緒だった瀬川グループの皆さん、共同研究でお世話になっている南谷先生、倉持先生、助教仲間の大塚さん、奥村さん、杉山さん、米田さん、測定でお世話になった機器センターの藤原さん、上田さん、浅田さん、賣市さん、宮島さん、長尾さん、伊木さん、藤川さん、久保田さん、そして上記の環境を作り上げてくださった川合前所長、渡辺所長はじめ運営の先生方に、深く感謝申し上げます。

分子研最高でした！